2022年6月26日 川越教会

丸山　勉

「祈り」という奇跡

［コロサイの信徒への手紙3章18節～4章6節]

妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはならない。子供たち、どんなことについても両親に従いなさい。それは主に喜ばれることです。父親たち、子供をいらだたせてはならない。いじけるといけないからです。奴隷たち、どんなことについても肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとしてうわべだけで仕えず、主を畏れつつ、真心を込めて従いなさい。何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。不義を行う者は、その不義の報いを受けるでしょう。そこには分け隔てはありません。主人たち、奴隷を正しく、公平に扱いなさい。知ってのとおり、あなたがたにも主人が天におられるのです。

目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。同時にわたしたちのためにも祈ってください。神が御言葉のために門を開いてくださり、わたしたちがキリストの秘められた計画を語ることができるように。このために、わたしは牢につながれています。わたしがしかるべく語って、この計画を明らかにできるように祈ってください。時をよく用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい。いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう。

[１]　「祈り」は静かなことか

早いですね。6月も今週で終わるということは、一年の半分が経過する、ということになります。つくづく思うことは、これだけ羽が生えたように時間が飛ぶように経過するということは、あっという間に一生が終わってしまうことかもしれませんし、その意味では、本当に思いを込めながら一日一日を過ごしてゆきたいものだと思います。（中々そう出来ないから言うのですけれども）。今日で「コロサイの信徒への手紙」を学ぶ最後になります。来週からはやはりパウロの獄中書簡の一つと言われている「エフェソの信徒への手紙」を読むことになります。

今日はコロサイ書の3章の後半から4章のはじめの部分を読んで頂きました。「聖書教育」では4章の2～6節だけなのですけれども、ちょっと唐突な感じもしますので、流れを見て頂くためにも3章18節以下から読んで頂きました。

さて、今日の箇所のキーワードは「祈り」だと思います。4章2節に「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい」と書かれています。信仰者にとって「祈り」とは切り離すことが出来ないものだとよく言われますし、「敬虔なクリスチャン」という言い方をするときに、「静かに首を垂れて良く祈っている人」というイメージが先行してしまっているようなことがあると思います。それは、宗教的で穏やかなイメージですよね。ただ、どうなのでしょう？信仰の生活をしていると、「祈り」というのは、必ずしも静謐なことではなく、むしろ「戦い」と言っても良いような真剣なこと、自分の中の傾向に抗ってでも神様に向い合うことだな、と思わされます。祈りは儀式や儀礼的なことではなく、具体的な生活に繋がることですよね。そして、それは一人ひとり皆違う祈りの形を持っていると思います。

［２］ 私たちを「祈り」へと導くもの

私たちを「祈り」へと導くのは何でしょうか。それは自然的な「敬虔な思い」と言うよりも、自らの「無力さ（無力感）」だと思います。全てがうまくいっている、自分の計画通りに人生が進んでいる、という人は祈ることはないのではないでしょうか？その意味で、読んで頂いた3章18節以下は、とても具体的な現実の葛藤を持ちながら、そこから逃避しない生き方が勧められていると思うのです。例えば3:18で「妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい」と。これは男尊女卑でしょうか？すぐそのあとでパウロは言います。19節「夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはならない」。―夫婦‟双方“に勧めています。これは当時の社会の在り方の中にあっては画期的な言葉だと思います。その後パウロは親子関係についても語り（20-21節）、また奴隷という存在が社会的に認められている中にあって、その奴隷も主を信じる者として誇りを持って生き、そして、その奴隷の主人も、権力で奴隷をモノ化して扱うのではなく、「公平に」扱いなさいと勧めています（3:22-4:1)。とても画期的だと思います。しかも、これはただの「きれいごと」ではありません。道徳の教えではないと思います。「信仰」に生きることの勧めです。23節と24節の言葉は、今の私たちにも、具体的に伝わってくる言葉ではないでしょうか。―「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです」。

ただ、「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい」と言われても、私たち生来の人間にはそれは出来ないのです。具体的な人間関係で受けた傷があるなら尚更です。「あなた、現実が分かっていないでしょ」と言いたくなる。怒りが、憎悪が、リベンジが自分の生きる力にだって成り得ることがあります。でもそれが本当の解決になるのでしょうか。本当の意味でその人が癒されるのでしょうか？だから、パウロはある意味、人間的には馬鹿げたような、あり得ない勧めを語るのです。―「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい」。「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい」。パウロは‟祈る”人でした。彼は実際この時、ローマで捕われの身になってなっていたと言われます。全く理不尽なことです。ただ福音を語った故にです。しかし、これまでも彼は、様々な現実や逆境に出会う中で祈って来ました。いや、そもそも彼の信仰者としての出発点というのは、キリスト者に対する憎悪に息弾ませる最中で、神様の光に打たれて三日間目が見えなくなり、盲目にされる中、無力さの極みの中で祈ったことでした（使徒言行録9章）。祈らされた、と言うべきか。…つまり、祈りというのは、無病息災・家内安全・商売繁盛といったおみくじのようなことではなく、自分自身が変えられていく、ということなのです。パウロ自身それを体験し、そしてその神様との関係を新しくすることによって「癒されて」いったのです。ですから、まだ顔を合わせたことのないコロサイの教会の人々に対しても、人間関係で色々な病むことがあるだろう、そういうことはいつだってある。けれども、一時的な感情や、呪いのような気持ちに打ち負かされることなく、かえってその中で「感謝」を探しながら、「目を覚まして、ひたすら祈りなさい」と言うのですね。

［３］ 祈り合う群れ・教会

　そして、パウロはただ一方的にそれを勧めるのではありません。この「私のためにも祈って欲しい」と語っています。4:3 「同時にわたしたちのためにも祈ってください。神が御言葉のために門を開いてくださり、わたしたちがキリストの秘められた計画を語ることができるように。このために、わたしは牢につながれています。わたしがしかるべく語って、この計画を明らかにできるように祈ってください」。これが教会です。教会は、キリストの素晴らしく秘められた計画（今日交読文で読んだ黙示録21章の言葉は最たるものでしょう）が、ある意味、憎悪の連鎖、潜在的自殺者がたくさんいると思える（私自身そうだったと言えるのです）、永続的な癒しが見いだせないこの世に、「神様の福音（良き知らせ）」を語るために立てられているのです。そしてそれは、具体的な私たちの生き方、交わりの仕方にも反映される筈です。「時をよく用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい。いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。」　時・時代に敏感であること、すべての人を招くキリストに従って、私たちの態度が尊大にならず、いつもお互いに迎え合う、生きた快い言葉を語るように努めなさい、と言うのですね。

　ただ、これは私自身の教会観でもありますが、私たちはあまり勇ましくならない方が良いのかなと思っています。教会が単にGo Go！で行くと、自分は付いていけないと思う者が出て、孤立した思いを与えてしまいます。特にこのようなコンピューター世界・デジタル世界はそうかもしれません。失ってはいけないのは、塩の味付けです。コンピューターは電気がなければお終いです。もっと、もともとあるものを本当に大事にしていきたいと思います。それが何なのか。それを皆で一緒に考えて行きたいと思います。

祈り合う群れ・教会。これは単に美しい言葉なのではなく、一見無力と思える祈りこそが、教会を支えているのですね。私は教会は「明るい元気な場」よりも「癒しの空間」であるべきだろうと思います。その中心に主イエス様がおられ、それ故私たちの「祈り」がある場所。―「祈り」の反対は何だと思いますか？私は「武器」ないし「戦争」だと思います。例えば鉄砲・ミサイルのような爆撃、これは誰が撃ったか分からなくても人が死にます。一瞬にして簡単に。しかもそれは上官の命令とか、自分がしないと自分がやられるという恐怖の連鎖の中で、自分も相手も壊れていくことです。しかし、「祈り」はそうではありません。武器は持ちません。両手を合わせるだけです。でも不思議です。人は祈る時に相手を叩くことは出来ないと思います。「祈り」というのは、祈る対象のためでもありますが、実は自分自身がそれで癒されている、救われているのです。これは、神様の奇跡だと思います。イエス様を信じるということは、祈る者にならせて頂けるということです。あの十字架の上で主は祈って、私たち罪人を完全に受容して下さったのです。「父よ、彼らをお赦し下さい。何をしているのか分からないのです」。また、「今日、あなたはわたしと共にパラダイスにいる」。―私たちが祈るということは、全ての人を愛するイエス様のわざ、神様のわざに参加する、ということなのだと思います。

　今日もこの後、教会学校の交わりを短い時間ですが行いたいと思います。同じ神様、イエス様に繋げられて生きている。そのことを確認できる機会というのは、礼拝もそうですけれども、分ち合いの時間は更に有益だと思います。きっと今後コロナの状況も良くなり、いたずらに恐れることがらは減って行くと思います。ご一緒に、私たちの共同体を通し主を証しして行きましょう。お祈り致します。

「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい」。―私たちに対するあなたからの呼びかけを感謝致します。祈ること自体が大きな恵みであり、奇跡であります。

時には自分のその時の思いに逆らってでも、あなたに向かっていく、あなたにぶつかっていく、その心を私たちに与えて下さい。十字架の赦しのもとに私たちを一つにし、御国の確かな希望を抱き、試練の中にもあなたの助けを頂き、共に支え合い、生かし合っていくことをさせて下さい。この世の無為で愚かな戦いを一日も早く終えさせて下さい。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。